

平成11年度企画展

宮代町郷土資料館

『古代の道仏ムラと姫宮神社古墳』

8/17



10/24

開催にあたって

古墳時代は、さきたま古墳群などで代表されるように、一般的には大規模な古墳が造られる時代として知られております。しかし、そうした大規模な古墳もその時代の一時期を画したに過ぎず、初期の古墳や終末期の古墳は比較的小規模のものが多くようです。町内では、姫宮神社古墳の存在が知られておりますが、いずれも、これらはその地域を代表する豪族の墓であるといえます。

一方、そうした古墳を残さない庶民の暮らしのあとである「むら」も、現在山崎山遺跡、山崎遺跡、道仏遺跡など町内数か所の遺跡から、その一部が発掘されております。

今回は、平成9年度に発掘調査を実施した道仏遺跡、そして同時代に造られたと推定される姫宮神社古墳にスポットをあて展示いたしました。また、参考として近隣の遺跡で発掘調査された資料もあわせて展示いたしました。

古墳時代は、ともすると大規模な古墳等に目がいきがちですが、小さな地域の小さな古墳、そして周辺に庶民の日々の暮らしが展開されていたことも忘れてはならないことであると思います。こうした展示を通じて、宮代町の古代の一端に触れていただければ、幸いに存じます。

おわりに、本企画展開催に当たり、こころよく資料を貸していただいた春日部市教育委員会、杉戸町教育委員会、ご指導いただいた関係各位に心からお礼申し上げます。

姫宮神社古墳出土円筒埴輪

姫宮神社古墳とは？

姫宮神社本殿左手の奥に八幡社がありますが、ここが小高くなっているのはご存知でしょうか？。この小高い丘が古墳です。この周囲からかつて埴輪が出土したことが知られております。ここから南東へ100m程離れた所で行った試掘調査でも、埴輪が出土しました。また、神社境内からも出土しています。こうしたことから、古墳時代後期（1,450年前頃）この付近は小さな円墳が多数存在した、いわゆる古墳群があったことが推定されます。

古墳とは？

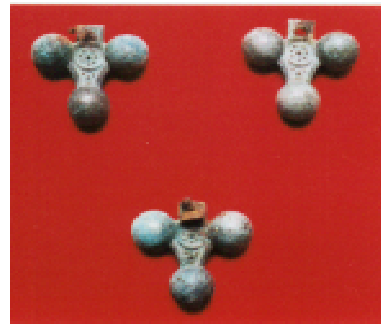
4世紀頃から7世紀末ころまでに造られた古代の豪族(土地の支配者)の墳墓です。

一般的には丘状に盛土して、丘状の盛土した部分に横穴式石室や縦穴式石室などを設け、さらに土等で覆い高塚に築いたものです。また、周囲には堀を巡らします。墳丘上には数列にわたり円筒埴輪や、一定の部分に人物などの形象埴輪が並べられ、儀礼具として用いられたといわれています。

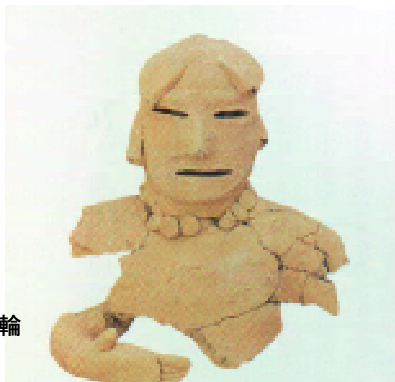
なお、古墳の形態には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などがあります。

春日部市内牧塚内古墳群

春日部市大字内牧字塚内にあり、東西700m、南北600mの範囲に13基の古墳が知られています。昭和52年に行われた発掘調査では鉄剣や鉄鏃などの副葬品とともに、武蔵型と下総型のそれぞれの円筒埴輪が同じ古墳から発掘され、古代の春日部が武蔵国と下総国の接点にあったことがうかがわれます。



目沼9号墳から出土した鈴杏葉



塚内4号墳出土人物埴輪



目沼古墳出土円筒埴輪

杉戸町 目沼古墳群

杉戸町大字目沼にあり、東西300m、南北500mの範囲に消滅したものも含めて総数20基の古墳が確認されています。かつては、100基近くもあったようです。江戸時代から有名で、文化4年(1804)には村民が古墳の石室を掘り出し、当時の代官に届け出ていることが碑文に記されています。発掘調査は数多く行われ、一部の埴輪や副葬品などは埼玉県立博物館で展示されています。ことに9号墳から出土した鈴杏葉(馬の飾り金具)は、県内では同種のものが辛亥銘鉄剣の出土した稲荷山古墳でも出土している貴重なもので、県指定文化財となっています。



塚内4号墳主体部

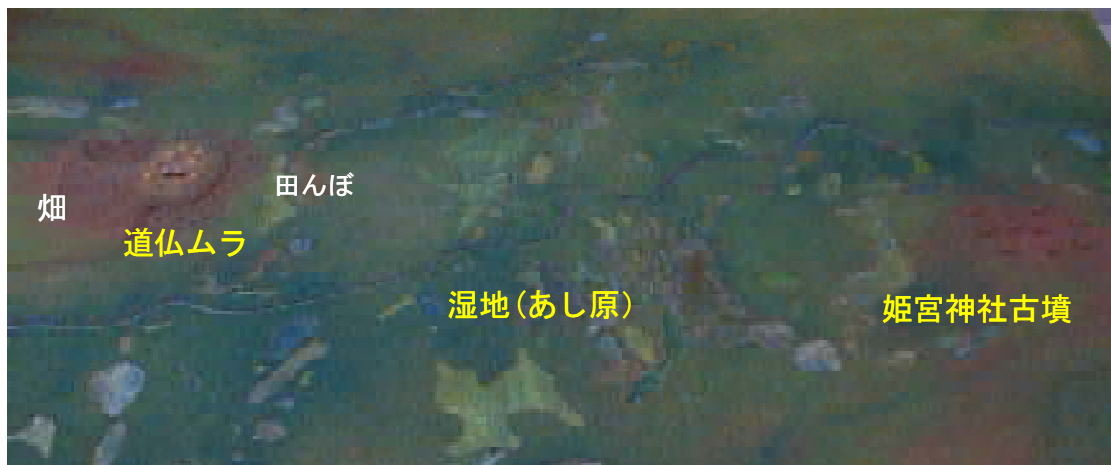


塚内4号墳出土鉄剣

古代のムラ

弥生時代になると首長（例えば邪馬台国の卑弥呼）が現われクニを形成していきます。古墳時代前期には豪族の館も造られ（群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡等）、彼らにより、人々が支配されていたようです。では、道仏遺跡のムラや、姫宮神社古墳があった古墳時代後期（1,450年前頃）はどのような社会であったのでしょうか。

庶民は竪穴式、首長クラスは平地式の家に住まい、倉庫などは高床式の建物、各種の工房は竪穴式の建物などムラ内の建物にもバラエティーがあることが、古墳から発掘される家形の埴輪や鏡に刻まれた建物などから想像できます。また、ムラの周囲にはムギやマメ、ウリ、ヒエなどを栽培した畑や、谷間の湿地を開発した田んぼ、古墳などがある祭祀的な場所も確立されます。この時期、古墳の規模は小さくなりますが、数多く造られるようになります。これは、首長だけでなく、ムラの有力者やその家族までもが埋葬されたからだといわれています。



道仏ムラ・姫宮神社古墳周辺の地形復元模型

道仏遺跡の発掘調査

道仏遺跡は道仏地区区画整理事務所建設に伴い発掘調査が行われ、僅か80㎡の調査にもかかわらず古墳時代後期（1,450年前頃）の住居の跡が7軒発掘されました。これらのことから、この付近一帯には当時、相当の集落があったと推定されます。発掘された住居跡の一軒からは剣などを形どった滑石製の石製模造品がたくさん出土しており、それらを作る工房であったのかもしれない。こうした石製模造品は、祭祀用具として用いられたようです。



道仏遺跡3号住居跡

遺跡からの出土品

土師器

土師器は平安時代に編纂された『延喜式』に土師器（はしのうつわ）として記されていることから、古墳時代から平安時代に焼かれた素焼きの土器を土師器（はじき）と呼びます。

煮炊き用の甕（かめ）や甗（こしき）、貯蔵用の壺や甕、飲食用の坏（つき）や碗、お供え用の高坏（たかつき）など様々な形の土師器が様々な用途に使われました。



道仏遺跡5号住居出土甗



道仏遺跡出土剣形品

須恵器

須恵器はもともと朝鮮半島の陶質土器の生産技術が伝来したもので、陶磁器を焼く窯と同じような登窯（竈窯）で焼かれました。

焼き方は、熱を加えている間、酸素の供給を一定時間止め、粘土中の酸化鉄を化学変化させることで、ネズミ色で硬い須恵器が出来上がります。道仏遺跡から出土した多くの須恵器は、形態等から東海地方などで焼かれたと考えられます。



目沼古墳出土須恵器

祭祀用具

道仏遺跡からは、滑石を用いて作られた石製模造品がたくさん発掘されました。

剣形品は剣を、有孔円盤は鏡を模しているといわれています。

天皇家の三種の神器でも有名な剣や鏡、玉を模したミニチュアで、権力の象徴を表わすものと考えられています。これらの遺物は榊などに釣り下げ神を迎える儀礼にも使われました。また、石製模造品だけでなく土製模造品の土玉もたくさん出土しています。

協力者・団体

姫宮神社、春日部市教育委員会
杉戸町教育委員会、庄和町教育委員会
宮代町史関係の皆さん

主な参考文献

『野外復元日本の歴史』新人物往来社
『古墳時代の知識』東京美術
『目沼8・9号墳』杉戸町教育委員会
『杉戸町目沼古墳』杉戸町教育委員会
『図録春日部の歴史』春日部市
『春日部市史考古編』春日部市

（執筆・編集／河井伸一）

生活用具

道仏遺跡からは古代の人々が使ったさまざまな道具が発掘されています

土錘は魚をとる網の錘（おもり）として、紡錘車は織物を織るときの道具として使われました。土器にも大きく2つの種類があります。素焼きの土師器と硬質の須恵器です。それらの中にも、壺や甕、坏（つき）、甗（こしき）など数多くの種類があり、それぞれ用途によって使い分けられていました。

また、赤彩が施された土器や、比企地方で作られた比企型坏（つき）、東海地方で焼かれた須恵器など遠くで焼かれたものもありました。陸路だけでなく水路や海路で運ばれたものと思われ、古代人の交流の広さがうかがわれます。

平成11年度企画展

『古代の道仏ムラと姫宮神社古墳』

展示解説パンフレット

発行／宮代町郷土資料館

南埼玉郡宮代町西原289

0480-34-8882

<http://www1.sphere.ne.jp/miyasiro>